

3-5					
主題	サービス実践者の心の変容プロセス				
副題	利用者の訴えに対する葛藤とその乗り越える感覚のプロセスについて				
キーワード 1	認知症ケアの葛藤	キーワード 2	ユマニチュード	研究(実践)期間	12ヶ月

法人名・事業所名	社福) 奉優会 特別養護老人ホーム白金の森				
発表者(職種)	成田寛一郎(施設長)				
共同研究(実践)者	西川あずさ(介護職)、蝦名沙弥(介護職)、川島怜維華(介護職)				

電話	03-3449-9611	FAX	03-3449-9617
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	当施設は、地域福祉の好循環を目指す施設である。医療機関や関係団体と連携し、福祉と防災の拠点として機能。個々のニーズに応じた生活サイクルをサポートし、認知症ケアにはユマニチュードを採用。多職種のスタッフがー丸となり、心温まる環境でご入居者に寄り添い、安心感と笑顔あふれる日々を提供している。
-------	--

<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>日本では高齢者が増加し、2025年にはその20%が認知症になると予測されている。特養での認知症ケアは重要な課題であり、2040年までに69万人の介護職員が必要だが、人手不足が深刻である。効果的なケア技法の導入と職員育成が求められている。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>本研究の目的は、ユマニチュードアプローチを実践する介護職員の心の変容プロセスを明らかにすることである。特に、利用者の訴えに対する葛藤と、それを乗り越えるプロセスに焦点を当てている。介護職員不足とストレスが増加する中で、ユマニチュード実践者が抱える葛藤とその克服方法を理解することは、心理的支援策の構築と職員の『やる気』向上に寄与する。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>本研究では、特養で働き、認知症介護の経験が3年以上ある介護職員3名にインタビューを実施した。対象者は当法人から選んだ。複線径路・等至性モデル(TEM)を用いて、ユマニチュード実践者の心の変化を分析した。TEMは多様な経験を示し、複雑な経験を理解するのに適している。この方法で、ユマニチュード実践者の心の変化を詳しく理解することを目指した。</p> <p>《4. 取り組みの結果》</p> <p>インタビュー調査と複線径路・等至性モデル(TEM)を用いた分析の結果、3名の介護職員がケアにおいて抱く葛藤とその背後にある要因が明らかになった。</p> <p>1、A氏の結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ●利用者の自主性と安全のバランスを取る葛藤 ●精神的負担や複雑なニーズへの対応、新しい介護手法の試みと挫折、人員不足などの課題 ●利用者の希望に応えるための介護を実践し、自己肯定感とモチベーションを高めている

2、B 氏の結果

- 利用者の希望と職務の義務の間で葛藤
- プレッシャーとストレスに対処しつつ、利用者理解と関係構築に努める
- 柔軟な思考で効果的なケアを模索し、コミュニケーションスキルの向上を図る
- 指導者として模範行動を示し、チーム全体の介護質を高めている

3、C 氏の結果

- 利用者の帰宅願望に対する葛藤、自己の役割と能力の認識、新しい関係構築の難しさ
- 効率的な業務と個別ケア、新人職員の育成、職員間の不和などの課題
- ユマニチュードの学習と実践を通じて自己成長と職員間の協力を促進

これらの結果により、各介護職員が直面する具体的な葛藤や課題、ユマニチュードアプローチが介護職員のメンタルヘルス保護と職業満足度の向上に寄与することが示された。

《5. 考察、まとめ》

本研究は、ユマニチュードアプローチを実践する介護職員の心の変化に焦点を当て、特別養護老人ホームの介護職員 3 名を対象に半構造化インタビューを実施し、複線径路・等至性モデル (TEM) で分析を行ったものである。

1、インタビュー調査結果

- A 氏：利用者中心のケアと信頼構築に重きを置く。
B 氏：自己認識とユマニチュードの学習を強調する。
C 氏：効率と個別ケアのバランスに葛藤を感じている。

2、共通点

- ・利用者中心のケア・自己認識と成長・関係構築・チームワーク・効率と個別ケアのバランス

3、相違点

- A 氏：感情と信頼に重点を置く。
B 氏：自己成長と学習に重点を置く。
C 氏：個別ケアと効率のバランスに重点を置く。

これらの結果から、A 氏、B 氏、C 氏はそれぞれ異なるアプローチを取っているが、いずれも介護職員の成長とケアの質向上に寄与していることが明らかになった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表に際し、対象者に口頭で確認を取り、発表以外で使用しないこと、不利益がないことを説明し、同意を得た。

《7. 参考文献》

石川翔吾,竹林洋一 (2017) エビデンスを生み出す認知症情報学—情動理解基盤技術とコミュニケーション支援—人工知能 32 巻 1 号 (2017 年 1 月),103-110”

《8. 提案と発信》

本研究は、ユマニチュードアプローチを実践する介護職員の葛藤と克服プロセスを分析し、メンタルヘルス保護と職業満足度向上に寄与することを明らかにした。

提言：①個別ケアの強化②オープンな関係構築③効率と個別ケアのバランス④ユマニチュードの学習と実践

発信：TEM の有効性を示し、具体的な施策で介護職員の育成とサポートを強化し、ケアの質向上を図ることを提案する。